
NightmareLucifer-**禁じられた夢**-

ハーツ・エルベリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t m a r e L u c i f e r - 禁じられた夢 -

【Nコード】

N 4 1 1 9 A

【作者名】

ハーツ・エルベリア

【あらすじ】

科学が発展した現代とは違い魔法と科学が共存する世界の話です
デタラメですが楽しんでもらえれば幸いです

第一話・悪夢・

「クッ！しつこい！」

私は大地を蹴りつけ暗闇を疾走する。後ろから迫る殺意…捕まればほんの数秒で私はこの世から消えることだろう。振り向かず銃を背後に乱射する、あの数ならどこに撃つても当たるだろう、だが後ろから迫るアイツラの気配は減るところが増えるばかりである。

銃も拾い物だ、いつ弾切れになるか…不安を振りきり更に足に力を込めて走り抜ける。やがて足に負荷がかかりすぎたのか、何も無い所で足をもつれさせ、転んでしまった…絶望が胸を占める…

「ウワアアア！来るな！来るなあああ！」

まともな思考が出来ない、後ろにずりさがりながら必死に銃を撃つ…カチンッ、空虚な音が響く、弾が切れた…アイツラの手が一斉に私を

「ウワアアアアアアア！」

そこで私は跳ね起きた。動悸がして息も荒い…最悪だ、いつもあの夢を見る。昔の非力な私が襲われる地獄のような悪夢を…

体を伝う嫌な感触、やはり下着は冷や汗でグッシヨリ濡れているようだ。私はしかめ面のため息をついてバスルームに向かった。

彼女がバスルームに消えたあと、残されたのは乱れたベッドとベッド脇に置かれた何かのカードと銃、そしてカードにはこう書かれていた

マジックガンナー

magician

アレンシア・ティラル

name: Alencir・Tellaru

sex: woman

age (歳): 18

class (階級) : SSS
と。

二十分程しただろうか彼女はスレンダーな服を着てバスルームから出てきた。

銃ホルスターにカードをポケットにしまうと、クローゼットを開けてそこに唯一あるレザージャケットを着る。そして、一度ベッドに振り向くが、やがて外に出るドアに向かった。

私は静かな市街を歩いている、だけど今は正午だ。昔はここも昼食を取る者達で賑やかだった…

今ではその皆のほとんどは収容所だ。意思のある病気《侵》の感染を増加させないために隔離されている。《侵》は初期症状はとも変なモノで悪夢を見ると言うので、私も悪夢を見た時不安になったけど、診断によると私は感染しても悪夢を見るだけで済むらしい。その体質のお陰で免れた《侵》の最終症状は、自分の意思を完全にのっつけられると言うこと…

見た目は変わらないのに人を襲う化け物になってしまった人、そうなってしまった人達は最先端の魔法や医術でも回復出来ない。だから壊すしかない、私達はその壊す事を《破戒》と総称している。気がつく、いつものトビラ前まで来ていた。

カードをトビラの横にあるスリットに通す、ピッ、という電子音と一緒にドアが開く。その奥は暗く見え難い、だが眼を凝らすと階段が下へ下へ続いている。私は階段を降りて光の射す入り口をくぐり抜けた。

To next story:

第二話・ガンナーギルド・

暗い所から移動した為光が眩しい、目が慣れてくるとそこには一昔前の酒場の光景があった。

テーブルやカウンターに座って酒を飲む人や賭け事を興じる者、バーテンダーと話す人…まさに典型的な酒場の風景だ、でもここは仕事請け負い所も兼ねている…そう、ここは私達マジックガンナーのギルドなのだ…

「よう！アレンシアじゃないか2日ぶりだな」

私に気付いた一人が声をかけてきた

「こっちで酒でも飲まねえか？」

「いやいや、1つ賭けでもしないかお前強いだろ、お前とするときが一番ワクワクするんだよ」

と皆から一斉に声をかけられる、私は誘いを

「後でね」

と断わり相棒の姿を探した。

酒場と言っても広さは格段に違う、何百という人数が休息を取れる広さなのだ…そのためここではバーカウンターが多数存在する。

私はカウンターでバーテンダーに相棒の場所を訪ね歩いた、五カ所回ってやっとその区域を担当するバーテンダーが隅のテーブルを指した。

そのテーブルには金髪で右耳にピアスをした青年と口のまわりに髭をたくわえいかにも熟練といった雰囲気の人がポーカーをしている。両方の札を覗くと金髪の青年の方がまだ札が大して揃っていないが熟練の方はすでにストレートフラッシュが揃っている。

「よしっ！勝負！」

青年はバツと札を出した。組はストレート…熟練の方はニヤニヤとしながらゆっくり札をオープンにする

「残念だったな、今回は俺の勝ちだ」

ストレートフラッシュであっさり勝ちを取った熟練は手を出す、青年は悔しそうにそこに金を置く。熟練は悠々とふところに金をしまうとやっと私に気付いたらしく

「よお、アレンシア悪いが相棒さんにはちよつとばかり稼がせてもらったぜ」

と熟練が言うが正直私は相棒には良い教訓になったと思い

「構わないわ、良かったらまた相手してあげて」

「そうか、こいつに用があるんだな俺は席を外すよ。それじゃあな」
「ええ、助かるわ」

彼が去った後うなだれたままの相棒に声をかける

「見事な負けっぷりだったわねローグ。今日で何連敗かしら？」

「五十九勝七十敗だよ連敗数なら十八連敗だ…あーこんなことだったら最後に大金に賭けなかったら良かった…」

私はその最後の一言に嫌な予感がして

「なにを賭けたの？」

「リベナルの魔具時計」

「ッ！それは私の大事にしてた時計！無くしたと思ったらローグ！あなただって人は！」

「俺の【ゲート】の中にあつた物だし整理を兼ねて中身を全部出したらあつたんだよ。無くした方に責任がある！」

「でも勝手にそれを賭けの対象にするのはもつと悪いと思うわよ」
「ヴッ…」

「まあ良いわ、仕事探しましょ。ただし弁償はしてね」

「了解…です…」

アレンシアは多少の痛みを伴いながらローグの襟首を持ってズルズルと引きずって依頼所に向かった

「痛てえって！もつと優しくしてくれ！」

「ウルサイ！あなたに口ごたえする権利は無いわ」

「ヒデエ…」

T
o

n
e
x
t

s
t
o
r
y
:

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4119a/>

NightmareLucifer-禁じられた夢-

2010年10月28日07時45分発行